



Title	『朱子語類』卷第一百 邵子之書 譯注 (その二)
Author(s)	辛, 賢
Citation	大阪大学大学院文学研究科紀要. 2015, 55, p. 19-41
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/55443
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

- 方彦壽『朱熹書院與門人考』（華東師範大學出版社、二〇〇〇年）
 田中謙二「朱門弟子師事年攷」（『田中謙二著作集』第二卷所收、汲古書院、二〇〇一年）
 垣内景子 他『『朱子語類』譯注 卷一～三』（汲古書院、二〇〇七年）
 垣内景子『『朱子語類』譯注 卷七・十二・十三』（汲古書院、二〇一〇年）
 興善宏 他『『朱子語類』譯注 卷十～十一』（汲古書院、二〇〇九年）
 中純夫 他『『朱子語類』譯注 卷十四』（汲古書院、二〇一三年）
 吾妻重二 他『『朱子語類』譯注 卷八十四～八十六』（汲古書院、二〇一四年）
 垣内景子 他『『朱子語類』譯注 卷百十三～百十六』（汲古書院、二〇一二年）
 垣内景子 他『『朱子語類』譯注 卷百十七～百十八』（汲古書院、二〇一四年）
 山田俊『『朱子語類』譯注 卷百二十五』（汲古書院、二〇一三年）
 野口善敬 他『『朱子語類』譯注 卷百二十六（上・下）』（汲古書院、二〇一三年）

【21】易是卜筮之書、皇極經世是推歩⁽¹⁾之書。經世以十二辟卦管十二會⁽²⁾、綱定⁽³⁾時節、却就中⁽⁴⁾推吉凶消長。堯時正是乾卦九五⁽⁵⁾、其書與易自不相干。[只是加一倍推將去。] [方子]

【校注】

なし。

【譯】

朱子「『易』は卜筮の書、『皇極經世書』は推歩の書である。『皇極經世書』は、十二辟卦をもって十二會をつかさどり、時節を束ね、ことに吉凶消長を推し量る。（『皇極經世書』の紀年に）堯の時代がちょうど乾卦九五にあたるのも、『皇極經世書』と『易』とは自ら相矛盾していないということだ。」「ひたすら倍数を掛けて展開させる。」 [李方子]

【注】

- (1) 推歩 日月五星の度数を推して作った曆書。「推歩謂究日月五星之度、昏旦節氣之差」（『後漢書』馮緄傳注）
 (2) 一元十二會（十二萬九千六百年）の時間的周期を十二消息卦（復☱・臨☱・泰☱・大壯☱・夬☱・乾☰・姤☱・遯☶・否☷・觀☶・剝☶・坤☷）に割り當てる。詳しくは、【17】條の注（5）及び〔圖表5〕を参照（辛賢「『朱子語類』卷第一百 邵子之書 譯注（その一）」『大阪大學大學院文學研究科紀要』五三、二〇一三）。
 (3) 綱定 束ねて定める。
 (4) 就中 そのなかでも。とくに。
 (5) 『皇極經世書』によると、「唐堯起於月之巳、星之癸。一百八十、辰之二千一百五十七。」

推而上之、堯得天地之中數也」、「甲辰當帝堯肇位于平陽、號陶唐氏。」と、堯の即位を甲辰の年とする。この堯の即位時期を「乾九五」とする指摘は、朱子に始まる。ほかに、乾九五説を是とする見解として、「帝堯即位之年、竹書紀年云、堯元年丙子。張行成謂甲辰堯始生、戊辰爲唐侯、丙子即帝位。惟邵子以爲元年甲辰、而朱子從之。故謂堯時正是乾卦九五。金仁山作綱目前編、逆溯堯年始甲辰用邵子説也。」(清・王植『皇極經世書解』卷二)がある。清・黃宗羲は「按一會得一卦、會有三十運。是五運得一爻也。已會當星之已一百七十六、已入乾上九、唐堯在星之癸一百八十、是上爻將終安得云九五哉。」(『易學象數論』卷五「皇極二」)と述べ、乾九五説に疑問を提示している。

【22】 晏⁽¹⁾問易^(校)與經世書同異。曰「易是卜筮、經世是推步。是一分爲二、二分爲四、四分爲八、八分爲十六、十六分爲三十二。又從裏面細推去。」 [甘節]⁽²⁾

【校注】

(校) 楠本本に「易」字なし。

【譯】

晏淵、『易』と『皇極經世書』との異同について質問した。

朱子「『易』は卜筮であり、『皇極經世書』は推歩である。『易』は、一から分かれて二と爲り、二から分かれて四と爲り、四から分かれて八と爲り、八から分かれて十六と爲り、十六から分かれて三十二と爲る。またその内部より細分されていく。」 [甘節]

【注】

(1) 晏淵 字は亞夫、號は蓮塘、涪州涪陵縣(四川省)の人。『宋元學案』及び『宋元學案補遺』卷六十九に略傳など、記述が見える。晏淵の記録は四百十數條に及び、そのうち、三六四條は『易』に關する問答である。田中謙二「朱門弟子師事年攷」(二二三頁～二二四頁)を參照。

(2) 甘節 記録者の甘節。字は吉甫、撫州臨川縣(江西省)の人。『宋元學案』卷六十九に略傳がある。

【23】 (校1) 叔器⁽¹⁾問(校2)「經世書『水火土石』⁽²⁾、石只是金否。」曰「它分天地間物事皆是四^(校3)。如日月星辰^(校4)、水火土石、雨風露雷、皆是相配^(校5)。」又問「金生水、如石中出水、是否。」曰(校6)「金^(校7)是堅凝之物、到這裏堅實後、自拶得水出來。」又問「伯溫解經世書如何。」曰(校8)「他^(校9)也只是說將去、那裏面曲折⁽³⁾精微^(校10)、也未必曉得。康節當時^(校11)只說與王某、不曾說與伯溫。模樣⁽⁴⁾也知得那伯溫不是好人。」 [義剛]⁽⁵⁾

〔校注〕

- (校1) 楠本本は「叔器問～自撈得水出來」と、「又問～不是好人」とで二箇條に分かれる。また「又問～不是好人」の條に次いで「叔器問～自撈得水出來」が續き、文章の前後が見られる。
- (校2) 楠本本は、「叔器問」を「胡叔器答問」に作る。
- (校3) 楠本本は、「水火土石～皆是四」の二十字が欠落している。
- (校4) 楠本本は、「如日月星辰」の五字なし。
- (校5) 楠本本は、「皆是相配」を「皆是相配得在」に作る。
- (校6) 楠本本は、「曰」を「先生曰」に作る。
- (校7) 楠本本は、「金」を「那金」に作る。
- (校8) 楠本本は、「曰」を「先生曰」に作る。
- (校9) 楠本本は、「它」を「他」に作る。
- (校10) 楠本本は、「曲折精微」を「精微曲折」に作る。
- (校11) 楠本本は、「康節當時」を「當時康節」に作る。

〔譯〕

叔器『『皇極經世書』に見える「水火土石」についてですが、「石」は「金」のことでしょうか。』

朱子『『皇極經世書』では天地間の事物をすべて四つに分ける。たとえば、日月星辰、水火土石、雨風露雷がそれであるが、これらはすべて互いに組み合わせられる。』

叔器「金が水を生ずるとは、石の中から水を出すというようなことでしょうか。」

朱子「金は堅く凝固した物として、凝固した後に自ら水を滴り出すからだ。」

叔器『『皇極經世書』についての邵伯温の解釋については、いかがでしょうか。』

朱子「彼もやはり説いている中身は非常に詳しく精緻ではあるが、いまだ必ずしも理解しているとは限らない。康節先生は當時、王某には色々と話をしていたが、伯温にはしなかった。どうも伯温は好人物ではなかったようだ。」 [黄義剛]

〔注〕

- (1) 叔器 胡安之。字は叔器、號は白齋。袁州萍鄉県（江西省萍鄉市）の人。『宋元學案補遺』卷六十九に略傳がある。
- (2) 「動之_レ大者謂之_レ太陽、動之_レ小者謂之_レ少陽、靜之_レ大者謂之_レ太陰、靜之_レ小者謂之_レ少陰。太陽爲_レ日、太陰爲_レ月、少陽爲_レ星、少陰爲_レ辰。日月星辰交、而天之體盡之矣。靜之_レ大者謂之_レ太柔、靜之_レ小者謂之_レ少柔、動之_レ大者謂之_レ太剛、動之_レ小者謂之_レ少剛。太柔爲_レ水、太剛爲_レ火、少柔爲_レ土、少剛爲_レ石。水火土石交、而地之體盡之矣。」（『觀物内篇』）とある。【7】の〔注〕(13)を参照。

- (3) 曲折　　すじみちが入りくんで変化の多いこと。轉じて、詳しい事柄。
- (4) 模様　　様子
- (5) 義剛　　記録者の黄義剛。字は毅然、撫州臨川縣(江西省)の人。『宋元學案』卷六十九に略傳がある。

【24】因論皇極經世、曰「堯夫以數推、亦是心靜知之。如董五經⁽¹⁾之類、皆然。」曰「程先生云、須是用時知之。」曰「用則推測。」因舉興化妙應知未來之事⁽²⁾。曰「如此又有術。」
[可學]

【校注】

なし。

【譯】

『皇極經世書』について話題が及んだ際、

朱子「堯夫先生は數理によって推察し、また虚心靜慮して道理を知った。董五經らも、皆同じである。」

朱子「程先生は『時を用いて(道理を)知ることができる』とおっしゃった。」

朱子「用いるとは、推し測ることだ。」

そこで興化の妙應が未來の事を知っていたという話題を取り上げた折、

朱子「そういうのには占術が使われる。」 [鄭可學]

【注】

- (1) 董五經　「如蜀山人董五經之徒、靜極通神、其身雖不離深山之中、而程子之動息、懸隔於數十里之外、彼却能不占而知之。非由其有得於神之一。何以能通靈於數十里之外耶。」(明・蔡清『易經蒙引』繫辭上傳)
- (2) 興化妙應　興化は福建省の興化府のこと。妙應については、「妙應者江南人宣和中往來京洛間、能知人休咎。佯狂奔走、飲酒食肉、不拘戒行、人呼之爲風和尚。」(明・田汝成『西湖遊覽志』卷十四)とある。

【25】^(校)皇極經世紀年甚有法。史家多言秦廢太后、逐穰侯⁽¹⁾。經世書只言「秦奪宣太后權⁽²⁾。」伯恭⁽³⁾極取之⁽⁴⁾。蓋實不曾廢。 [方子]

【校注】

(校) 楠本本には、本條なし。

〔譯〕

朱子『皇極經世書』の紀年法には甚だ道理がある。史家の多くは秦が宣太后を廢位し、穰侯を追放したと言う。だが、『皇極經世書』には、「秦、宣太后の實權を取り上げた」と述べられている。呂祖謙は、積極的にこの説を取っている。思うに實際は宣太后を廢位しなかったのだらう。」 [李方子]

〔注〕

- (1) 「於是廢太后、逐穰侯、高陵、華陽、涇陽君於關外。秦王乃拜范雎爲相。收穰侯之印、使歸陶、因使縣官給車牛以徙、千乘有餘。」(『史記』范雎蔡澤列傳)
- (2) 「乙未、秦拔魏鄴邱、罷穰侯相國及宣太后權、以客卿范雎爲相、封應侯。魏冉就國趙惠文王卒、子丹繼。是謂孝成王太后專政。」(『皇極經世書』卷六上「經世之已二千二百二十六」)
- (3) 伯恭 呂祖謙(一一三七～一一八一)の字。朱熹・張栻とともに東南の三賢として稱される。著述に『古周易』『春秋左氏傳說』『東萊左氏博議』『大事紀』『歷代制度詳說』などがある。『宋史』卷四百三十四、『宋元學案』卷五十一に傳記がある。
- (4) 「秦免魏冉相國、奪宣太后權、以客卿范雎爲丞相封應侯」(宋・呂祖謙『大事記』卷五)、その割り注に「以皇極經世修」とある。また、「解題曰、范雎傳書廢太后逐穰侯、高陵華陽涇陽君於關外。按本紀明年宣太后葬芷陽鄠山、九月穰侯出之陶。是宣太后之沒書薨書葬。初未嘗魏公子無忌諫魏王親奏之辭止曰、太后母也而以憂死、亦未嘗言其廢也。穰侯雖免相、猶以太后之故未就國、及太后既葬之後始出之陶耳。范雎傳所載特辯士增飾之辭、欲誇范雎之事、而不知甚昭王之惡也。邵氏皇極經世書曰、罷穰侯相國及宣太后權、以客卿范雎爲相、封應侯。蓋得其實矣。」(呂祖謙『大事記解題』卷五)とある。

〔26〕康節漁樵問對⁽¹⁾無名公序⁽²⁾與一兩篇書次第、將來刊成一集。 [節]

〔校注〕

なし。

〔譯〕

朱子「康節先生の『漁樵問對』『無名公傳序』と一二篇の書とを順序立てて、將來一集として刊行しようと思う。」 [甘節]

〔注〕

- (1) 漁樵問對 漁者と樵夫との問答形式によって、陰陽化育の理、性命道德の奥義を述べている。邵雍の著述とされるが、それには議論がある。『文獻通考』卷三十七「經籍考」は「邵雍撰」と記す。一方、宋・晁公武『郡齋讀書志』卷十に「漁樵對問一卷」を載せ、「張載撰。設爲答問、以論陰陽化育之端、性命道德之奧云。邵氏言其祖之書也、當考。」とあり、

清・盧文弨『羣書拾補』には、「邵雍撰」を誤りとして「『邵氏言其祖之書也、當考』、不應直題邵雍撰」と述べている。この他、清・周中孚『鄭堂讀書記』卷三十六に「其發明義理、頗與觀物内、外篇相近、則爲邵子所作無疑矣。」と述べ、思想的な特徴から邵雍の作としている。

- (2) 無名公傳序 邵雍の著述。「無名公生于冀方、長于冀方、老于豫方、終于豫方。年十歲求學于里人。(中略)四方之人迷亂不復得知。因號爲無名公。夫無名者、不可得而名也。(中略)太極者其無名之謂乎。」と、『老子』の「無名」を擬人化した自傳に自序を載せ、道學の哲理を述べている。

【27】^(校1)「『天何依。曰依乎地。地何附。曰附乎天。天地何所依附。曰自相依附。天依形、地依氣。』⁽¹⁾」所以重複而言不出此意者、唯恐人於天地之外別尋去處故也。天地無外、所謂『其形有涯、而其氣無涯。』⁽²⁾也。爲其氣極緊、故能扛^(校2)得地住。不然、則墜矣。氣外^(校3)須有軀殼⁽³⁾甚厚、所以固此氣也⁽⁴⁾。今之地動、只是一處動、動亦不至遠也⁽⁵⁾。 [謨]

【校注】

- (1) 楠本本は、【28】條と順番が入れ代わっている。
 (2) 楠本本は、「扛」の後に「降」字有り。
 (3) 楠本本は、「氣外」を「外更」に作る。

【譯】

朱子「『(樵者) 天は何に支えられていますか。(漁者) 曰く、地に支えられている、と。(樵者) 地は何に寄り掛かっていますか。(漁者) 曰く、天に寄り掛かっている、と。(樵者) 天地は何に支えられていますか。(漁者) 曰く、相互に附着して支え合っている。天は形(地)に支えられ、地は氣(天)に支えられている、と。』(ここで) 問答を繰り返して、このレベルの考えを越えられない理由は、人々が天地の外について、行き着く究極の所を探求しようとすることになるのに及び腰だったからである。天地は外側がない。いわゆる『その形は涯(限界) 有るも、その氣は涯無し』ということである。其の氣は極めて引き締まっているため、ずっと地を持ち上げていられるのだ。そうでなければ、地は墜ちてしまう。きっと、氣の外側は非常に分厚い殻でできていて、それがこの氣を固く引き締める所以であろう。だから、今の地の運動は、ただ一定のところまで運動し、その動きは遠い所までは及ばないのだ。」

【周謨】

【注】

- (1) 邵雍の『漁樵問對』に據る。「樵者問漁者曰、天何依。曰依乎地。地何附。曰附乎天。曰然則天地何所依附。曰自相依附。天依形、地依氣。其形也有涯、其氣也無涯。有無之相

生、形氣之相息、終則有始。終始之間、天地之所存乎。」

(2) 『漁樵問對』の一文。〔注〕(1)を参照。

(3) 軀殼 から、殼。

(4) 天の外側における固い軀殼は、固體としての天を意味するのではない。天は形質がなく、氣の急回轉によってできる氣の濃密な集積（高い壓力状態）、つまり「緊」の状態を指して言う。「天積氣、上面勁、只中間空、為日月來往。地在天中、不甚大、四邊空。」（『語類』卷二、理氣下「天地下」）「自古無人窮至北海、想北海只挨着天殼邊過。緣北邊地長、其勢北海不甚闊。地之下與地之四邊皆海水周流、地浮水上、與天接、天包水與地。」問「天有形質否。」曰「無。只是氣旋轉得緊、如急風然、至上面極高處轉得愈緊。若轉纔慢、則地便脫墜矣。」（『語類』卷二、理氣下「天地下」）詳しくは、山田慶兒『朱子の自然學』（岩波書店、一九七八）一五九頁～一六八頁を参照。

(5) 今之地動～動亦不至遠也 「地動」とは、地の四遊説として傳わる中国の傳統的地動説。冬至に地は北に上り、それから西へ三萬里を進み、夏至には南へ下り、さらに東へ三萬里を進む。春分・秋分にはその中央にある、という地の運動を示す。

「地有四遊。冬至地上北而西三萬里。夏至地下南而東復三萬里。春秋二分其中矣。地恒動不止。譬如人在舟而坐。舟行而人不覺。」（『尚書緯考靈曜』）「問「何謂四遊。」曰「謂地之四遊升降不過三萬里、非謂天地中間相去止三萬里也。春遊過東三萬里、夏遊過南三萬里、秋遊過西三萬里、冬遊過北三萬里。今曆家算數如此、以土圭測之、皆合。」（『語類』卷八十六、禮三「周禮 地官」）詳しくは、ジョセフ・ニーダム『中國の科學と文明』第五卷第二十章「宣夜説」、山田慶兒『朱子の自然學』（岩波書店、一九七八）二九頁～三一頁、一七一頁～一八四頁を参照。

【28】^(校) 舜弼問「天依地、地依氣。」曰「恐人道下面有物⁽¹⁾。天行急、地閣在中⁽²⁾。」 [可學]

〔校注〕

(校) 楠本本では、【27】條と順番が入れ代わっている。

〔譯〕

舜弼「『天は地に支えられ、地は氣に支えられる』という説についてお伺いします。」

朱子「おそらく人道のもとには事物の理がある。天（氣）の回轉は急いので、地は天の中央（氣中）に立っていられるのだ。」 [鄭可學]

〔注〕

(1) 『中庸』第二十章に「誠者、天之道也。誠之者、人之道也。誠者、不勉而中、不思而得、

從容中道、聖人也。誠之者、擇善而固執之者也。」とある。『語類』卷二十七(論語九「里仁篇下」)に「問「天道人道、初非以優劣言。自其渾然一本言之、則謂之天道。自其與物接者言之、則謂之人道耳。」曰「然。此與『誠者天之道、誠之者人之道』、語意自不同。」とあり、『中庸』第二十五章に「誠者、物之終始、不誠無物。是故君子誠之爲貴。誠者非自成己而已也、所以成物也。成己仁也。成物知也。性之德也。合外内之道也。故時措之宜也。」とある。朱注に「天下之物、皆實理之所爲。故必得是理、然後有是物。所得之理、既盡則是物、亦盡而無有矣。」と、人の道は、天の道、物の終始を盡くし、その理を得ること、すなわち、物我一體觀を背景にしている。

(2) 天は氣の集積、地は天(氣)の急速な回轉により、天の中心部に氣の渣滓(かす)が集まり凝結してできたもの。「天は一箇渾淪底物、雖包乎地之外、而氣則進出乎地之中。地雖一塊物在天之中、其中實虛、容得天之氣迸上來。」(『語類』卷七十四、易十「上繫上」)「天以氣而運乎外、故地擯在中間。使天有一息之停、則地須陷下。惟天運轉之急、故凝結得許多渣滓在中間。地者、氣之渣滓也。所以道輕清者爲天、重濁者爲地。」(『語類』卷一、理氣上「太極天地上」)「天之氣運轉不息、故閣得地在中間。銖未達。先生曰、如弄碗珠底、只恁運轉不住、故在空中不墜、少有息墜矣。」(『語類』卷六十八、易四「乾上」)。以上、山田慶児『朱子の自然學』(岩波書店、一九七八)七一頁～二一六頁を参照。

[29] (校¹)「古今曆家、只是推得箇陰陽消長界分爾⁽¹⁾、如何得似康節說得那『天依地、地附天、天地自相依附、天依形、地附氣』底幾句。向嘗以此數語附於(校²)通書之後⁽²⁾。欽夫⁽³⁾見之、殊不以爲然、曰『恐說得未是。』某云『如此、則試別說幾句來看。』⁽⁴⁾」廣云「伊川謂、自古言數者、至康節方說到理上。」曰「是如此。如揚子雲亦略見到理上、只是不似康節精。」

[廣]

[校注]

(校¹) 楠本本は、本條なし。

(校²) 正中書局本、朝鮮整版は、「於」を「于」に作る。

[譯]

朱子「古今の曆家は、陰陽消長の境界を推算するだけだった。どうして康節先生が説いた、かの『天は地に依り、地は天に付き、天地自ら相い依附す。天は形に依り、地は氣に附く』という數句に及ぶことができようか。かつて、(私は)この數語をもって『通書』(「濂溪遺事」)の後ろに注を付けようとしたが、欽夫(張栻)は、『恐らくは正しくないだろう』と、固くこの説に反対したので、私は『それなら別の數句を考えてみる』と言ったことがある。

輔廣「伊川先生は『古より數を言う者として、康節先生に至ってようやく道理を説くよう

になった』と仰いました。』

朱子「その通りだ。揚子雲（揚雄）もほぼ道理に達したが、康節先生の精緻さには及ばない。」 [輔廣]

〔注〕

- (1) 『語類』卷二 理氣下「天地下」に「古今曆家只推算得箇陰陽消長界分耳。」に同様の発言が見える。
- (2) ここで朱子の言う『通書』とは、次の一文を指す。「邵伯温作易學辨惑記康節先生事曰、伊川同朱光庭公挾訪先君、先君留之飲酒。因以論道。伊川指面前食卓曰、此卓安在地上、不知天地安在甚處。先君爲極論天地萬物之理、以及六合之外。伊川歎曰、平生惟見周茂叔論至此。」（周敦頤『通書』雜著「遺事」）
- (3) 欽夫 宋・張栻。理學に心を潛め、胡弘に師事し、朱子と交わる。『宋史』卷四百二十九、『宋元學案』卷四十四、五十に傳記がある。
- (4) 朱子が該当の「數句」をもって「遺事」に注を施そうとしたが、欽夫（張栻）が許さなかったという記述は、以下に確認できる。「濂溪遺事載邵伯温記康節論天地萬物之理以及六合之外、而伊川稱歎。東見錄云『人多言天地外、不知天地如何說内外。外面畢竟是箇甚。若言著外、則須似有箇規模。』此說如何。」曰「六合之外、莊周亦云『聖人存而不論。』以其難說故也。舊嘗見漁樵問對。『問「天何依。」曰「依乎地。」「地何附。」曰「附乎天。」「天地何所依附。」曰「自相依附。天依形、地附氣、其形也有涯、其氣也無涯。』」意者當時所言、不過如此。某嘗欲注此語於遺事之下、欽夫苦不許、細思無有出是說者。」（『語類』卷一百一十五 朱子十二「訓門人三」）

〔30〕問「康節云『雨化物之走、風化物之飛、露化物之草、雷化物之木。』⁽¹⁾此說是否。」曰「想且是以大小推排匹配去。」問「伊川云『露是金之氣。』⁽²⁾」曰「露自是有清肅底氣象。古語云『露結爲霜。』⁽³⁾今觀之誠然。伊川云不然⁽⁴⁾、不知何故。蓋露與霜之氣不同。露能滋物、霜能殺物也。又雪霜亦有異。霜則殺物、雪不能殺物也。雨與露亦不同。雨氣昏、露氣清。氣蒸而爲雨、如飯甑蓋之、其氣蒸鬱而汗下淋漓⁽⁵⁾。氣蒸而爲霧、如飯甑不蓋、其氣散而不收。霧與露亦微有異、露氣肅、而霧氣昏也。」 [備]

〔校注〕

なし。

〔譯〕

質問「康節先生は『雨は物の走を化し、風は物の飛を化し、露は物の草を化し、雷は物の木を化す』と仰いましたが、この説はいかがでしょうか。」

朱子「思うにただ大小をもって並べて組み合わせたに過ぎなからう。」

質問「伊川先生は『露は金の氣である』とおっしゃいましたが。」

朱子「露は本来的に清らかで肅かな氣象をもっている。古語に云う、『露は凝結して霜になる』と。今日考えてみても、誠にその通りである。伊川先生はそうでないと否定するが、その理由が何かは分からない。思うに露と霜との氣(象)は同じではない。露はよく物を滋し、霜はよく物を殺う。また雪と霜とも違いがある。霜は物を殺うが、雪は物を殺うことができない。雨と露ともまた同じではない。雨の氣は昏く、露の氣は清らかである。氣が蒸發して雨となるのは、まるで飯の甑に蓋をすれば、湯氣がふさがり、結露して滴るようなことである。氣が蒸發して霧となるのは、飯の甑に蓋をしなければ、湯氣が散って収まらないようなことである。霧と露ともやはりやや違いがあり、露の氣は肅かであるが、霧の氣は昏い。」 [沈憫]

〔注〕

- (1) 『觀物内篇』の一文。「水爲雨、火爲風、土爲露、石爲雷。雨風露雷交、而地之化盡之矣。暑變物之性、寒變物之情、晝變物之形、夜變物之體。性情形體交、而動植之感盡之矣。雨化物之走、風化物之飛、露化物之草、雷化物之木、走飛草木交、而動植之應盡之矣。」併せて【7】條の注(13)と同條の〔圖表3〕を参照されたい。
- (2) 「霜與露不同。霜金氣、星月之氣。露亦星月之氣、看感得甚氣即爲露、甚氣即爲霜。如言露結爲霜非也。」(『二程遺書』卷十八)
- (3) 「兼葭蒼蒼、白露爲霜。所謂伊人、在水一方。」(『詩』秦「兼葭」)「仲秋彌田、金德常綱。涼風清且厲、凝露結爲霜。」(『晉書』卷二十三「志」第十三「樂下」)
- (4) 汗下 結露して流れる。
- (5) 淋漓 滴る。

【31】^(校1)或問「康節云『道爲太極。』又云『心爲太極。』⁽¹⁾道指天地萬物自然之理而言。心指人得是理以爲一身之主而言。」曰「固是。但太極只是箇一而無對者。」^(校2)(2)

〔校注〕

(校1) 楠本本に本條なし。

(校2) 記録者の明記なし。

〔譯〕

ある人「康節先生は『道を太極と爲す』と云い、また『心を太極と爲す』とおっしゃいましたが、それは、道は天地万物自然の理であり、心は、人がその理を得て一身の根本とすることを指して言うのでしょうか。」

朱子「その通りだ。ただし、太極は唯一絶対的なものであり、これに匹敵する者はない。」

〔注〕

- (1) 「心爲太極。又曰道爲太極。太極道之極也。太玄道之玄也。太素色之本也。太一數之始也。太初事之初也。其成功則一也。」(『觀物外篇』下)
- (2) 「且如一陰一陽、便有對。至於太極、便對甚底。」曰「太極有無極對。」曰「此只是一句。如金木水火土、即土亦似無對、然皆有對。太極便與陰陽相對。此是『形而上者謂之道、形而下者謂之器』、便對過、却是橫對了。土便與金木水火相對。蓋金木水火是有方所、土却無方所、亦對得過。」(『語類』卷九十五「程子之書一」)

【32】(校) 康節云「一動一靜者、天地之妙也。一動一靜之間者、天地人之妙也。」⁽¹⁾蓋天只是動、地只是靜。到得人、便兼動靜、是妙於天地處。故曰「人者、天地之心。」⁽²⁾論人之形、雖只是器、言其運用處、却是道理⁽³⁾。 [啓]⁽⁴⁾

〔校注〕

(校) 楠本本に本條なし。

〔譯〕

朱子「康節先生云く、「一動一靜は、天地の妙用である。一動一靜の間なるものは、天地人の妙用である」と。思うに天は動、地は靜、人に及んでは、すなわち動靜を持ち合わせる。これが天地に妙用なるところである。故に「人は天地の心である」という。人の形から論ずれば、「器」の形而下のレベルだが、その働きから言えば、「道理」の形而上のレベルになる。」

[黃蓍]

〔注〕

- (1) 「夫一動一靜者、天地至妙者歟。夫一動一靜之間者、天地人之至妙至妙歟。是故知仲尼之所以能盡三才之道者、謂其行無轍跡也。故有言曰、予欲無言。又曰、天何言哉。四時行焉、百物生焉。其斯之謂歟。」(『觀物內篇』)「邵氏伯温曰、一動一靜者天地之妙用也。一動一靜之間者天地人之妙用也。陽闢而爲動、陰闔而爲靜、所謂一動一靜者也。不役乎動、不滯乎靜、非動非靜、而主乎動靜者、一動一靜之間者也。自靜而觀動、自動而觀靜、則有所謂動靜。方靜而動、方動而靜、不拘於動靜、則非動非靜者也。易曰、復其見天地之心乎。天地之心蓋於動靜之間有以見之、聖人之心、即天地之心也、亦於此而見之。退藏於密、則以此洗心焉。」(『皇極經世書解』卷六)
- (2) 「故人者、其天地之德、陰陽之交、鬼神之會、五行之秀氣也。故天秉陽、垂日星。地秉陰、竅於山川。播五行於四時、和而后月生也。是以三五而盈、三五而闕。五行之動、迭相竭也、五行四時十二月、還相爲本也。五聲六律十二管、還相爲宮也。五味六和十二食、還

相爲質也。五色六章十二衣、還相爲質也。故人者、天地之心也、五行之端也、食味別聲被色而生者也。」(『禮記』禮運篇)

(3) 「形而上者謂之道。形而下者謂之器。化而裁之謂之變、推而行之謂之通。」(『易』繫辭上傳) 「性是形而上者、氣是形而下者。形而上者全是天理、形而下者只是那查滓。至於形、又是查滓至濁者也。」(『語類』卷五、性理二「性情心意等名義」)

(4) 記録者の黄晷(一一四七〔又は一一五〇〕～一二一二)。字は子耕、得齋と號する。隆興府分寧縣(江西省修水縣)の人。北宋の詩人黄庭堅が従祖父にあたる。『宋元學案』卷六十九、『宋史』卷四二三及び葉適「黄子耕墓誌銘」(水心先生文集卷十七)に傳記がある。田中謙二「朱門弟子師事年攷」一〇九頁を参照されたい。

【33】人身是形耳、所具道理、皆是形而上者。蓋「人者、天地之心也。」⁽¹⁾康節所謂「一動一靜之間、天地人之至妙」者歟。 [人傑]

【校注】

なし。

【譯】

朱子「人の身體はただ形器であるが、そこに備わっている道理は、まったくの形而上のものである。思うに「人は天地の心」(『禮記』禮運篇)というのは、康節先生の言う「一動一靜の間は、天地人の至妙」なるものなのか。」 [萬人桀]

【注】

(1) 「故人者天地之心也、五行之端也、食味別聲被色而生者也。」(『禮記』禮運篇)

【34】^(校)無極之前⁽¹⁾、陰含陽也。有象之後、陽分陰也。陽占却陰分數。 [文蔚]⁽²⁾

【校注】

(校) 楠本本は、【33】と【34】との間に『語類』第六十五「易一」綱領上之上「伏羲卦畫先天圖」における「先天圖如何移出方圖在下。先生云是某排出。泳。」の一條が挿入されている。

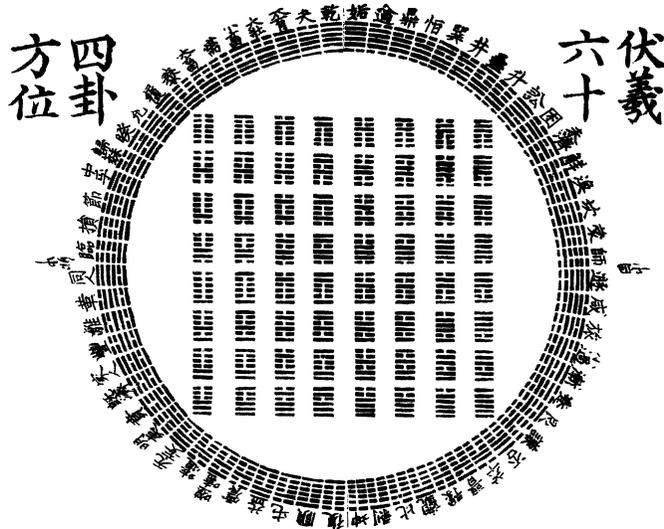
【譯】

朱子「無極の前は、陰が陽を含む。有象の後、陽は陰より分かれる。陽は陰中に割合を占める。」 [陳文蔚]

【注】

(1) 問「邵先生說『無極之前』。無極如何說前。」曰「邵子就圖上說循環之意。自姤至坤、是陰含陽。自復至乾、是陽分陰。復坤之間乃無極、自坤反姤は無極之前。」(『語類』卷

六十五「易一」綱領上之上「伏羲卦畫先天圖」)



〔伏羲卦畫先天圖〕(宋刊本『周易本義』)

(2) 記録者の陳文蔚。字は才卿、克齋先生と稱す。信州鉛山縣(江西省)の人。『宋元學案』卷六十九に略傳がある。田中謙二「朱門弟子師事年攷」九五頁～九七頁を参照されたい。

【35】「^(校1)性者、道之形體。心者、性之郭郭⁽¹⁾。身者、心之區宇、物者、身之舟車。」⁽³⁾此^(校2)語雖說得粗^(校3)、畢竟大概^(校4)好。 [文蔚]

【校注】

(校1) 楠本本は、「性者～」の前に「先生舉邵康節語」の七字有り。

(校2) 楠本本は、「此」の前に「曰」字有り。

(校3) 楠本本、和刻本、正中書局本は、「粗」を「麤」に作り、朝鮮正版は「麤」に作る。

(校4) 楠本本、朝鮮正版、正中書局本、和刻本は、「概」を「槩」に作る。

【譯】

朱子 「性は、道が具體化された形體、心は、性の外側を取り巻く城郭である。身は、心を収める容れ物、物は身を載せる乗り物である」と。この康節先生の語は大まかではあるが、結果的におおむね正しい。」 [陳文蔚]

【注】

(1) 心者性之郭郭 「淳問「心是郭郭、便包了性否。」先生首肯、曰「是也。如横渠『心

統性情』一句、乃不易之論。」(『語類』卷一〇〇「邵子之書」)、「又曰邵堯夫說性者道之形體、心者性之郭郭。此說甚好、蓋道無形體、只性便是道之形體。然若無箇心、却將性在甚處。須是有箇心、便收拾得這性、發用出來。蓋性中所有道理、只是仁義禮智、便是實理。」(『語類』卷四性理一「人物之性氣質之性」)、「叔器問「先生見教、謂『動處是心、動底是性』。竊推此二句只在『底』『處』兩字上。如穀種然、生處便是穀、生底却是那裏面些子。」曰「若以穀譬之、穀便是心、那爲粟、爲菽、爲禾、爲稻底、便是性。康節所謂「心者、性之郭郭」是也。包裹底是心、發出不同底是性。心是箇沒思量底、只會生。又如喫藥、喫得會治病是藥力、或涼、或寒、或熱、便是藥性。至於喫了有寒證、有熱證、便是情。」(『語類』卷五性理二「性情心意等名義」)、「性情與心固是一理、然命之以心、却似包著這性情在裏面。(中略)邵堯夫亦云『性者、道之形體。心者、性之郭郭。身者、心之區字。物者、身之舟車。』語極有理。」(『語類』卷六十 孟子十 盡心上「盡其心者章」)

- (2) 邵雍著『伊川擊壤集』自序中的一文。「古者謂水能載舟、亦能覆舟。是覆載在水也、不在人也。載則爲利、覆則爲害、是利害在人也、不在水也。不知覆載能使人有利害耶、利害能使水有覆載耶。二者之間必有處焉。就如人能蹈水、非水能蹈人也。然而有稱善。蹈者未始不爲水之所害也。若外利而蹈水、則水之情亦由人之情也。若內利而蹈水、則敗壞之患立至於前。又何必分乎人焉水焉。其傷性害命一也。性者道之形體也、性傷則道亦從之矣。心者性之郭郭也、心傷則性亦從之矣。身者心之區字也。身傷則心亦從之矣。物者身之舟車也、物傷則身亦從之矣。是知以道觀性、以性觀心、以心觀身、以身觀物、治則治矣。然猶未離乎害者也。」(『伊川擊壤集』自序)

【36】先生問「性如何是道之形體^(校1)。」淳曰「道是性中之理。」先生曰「道是泛言、性是自己身上說。道在事物之間、如何見得。只就這裏驗之。〔砥錄作「反身而求。】」性之所在、則道之所在也。道是在物之理、性是在己之理。然物之理、都在我此理之中。道之骨子便是性^(校2)。」劉問^(校3)「性、物我皆有、恐不可分^(校4)在己、在物否。」曰「道雖無所不在、須是就已驗之而後見。如『父子有親、君臣有義』⁽¹⁾、若不就已驗之、如何知得是自有^(校5)。『天叙有典』⁽²⁾、典是天底、自我驗之^(校6)、方知得『五典五惇』。『天秩有禮』、禮是天底、自我驗之^(校7)、方知得『五禮有庸』。」淳問「心是郭郭、便包了性否。」先生首肯、曰「是也^(校8)。如橫渠『心統性情』⁽³⁾一句、乃不易之論^(校9)。孟子說心許多、皆未有似此語端的。子細看、便見其他^(校10)諸子等書、皆無依稀^(校11)(4)似此^(校12)。」^(校13)淳^(校14)。寓同^(校15)(5)。砥同^(校16)(6)。

【校注】

(校1) 楠本本は、「先生舉邵子言性者舟車、問性如何是道之形體」に作る。

(校2) 楠本本は、「先生曰～道之骨子便是性」を「先生曰道統言性、是以己言之」に作る。

- (校3) 楠本本は、「劉問」を「劉曰」に作る。
- (校4) 楠本本は、「分」を「分別」に作る。
- (校5) 楠本本は、「曰道雖無所不在～如何知得是本有」を「曰須就已驗之、若不驗之已如何知得有父子之親有君臣之義」に作る。
- (校6) 楠本本は、「自我驗之」を「須是自我驗之」に作る。
- (校7) 楠本本は、「方知得五典五惇～自我驗之」の十九字なし。
- (校8) 楠本本は、「淳問～曰是也」の十八字なし。
- (校9) 楠本本は、「如横渠～乃不易之論」を「又曰邵子說這處較之横渠心統性情說得、又密真不易之論」に作る。
- (校10) 正中書局本は、「他」を「能」に作る。
- (校11) 朝鮮整版は、「稀」を「稀」に作る。
- (校12) 楠本本は、「孟子説～皆無依稀似此」を「孟子之後、並不見人說得依稀似此」に作る。
- (校13) 楠本本は、この直後に「惟韓退之庶幾近之伊川謂能將許大見識尋求真个如此王文中硬將古今事變來壓捺恁地說於道體元不曾見得在漢只有个董仲舒見道不分明如何曰也是鶻突如云性者生之質性非教化不成似不識性善底性」の文がある。
- (校14) 楠本本は、「淳」の字なし。
- (校15) 楠本本は、「寓同」を「寓」に作る。
- (校16) 楠本本は、「砥同」の二字なし。

〔譯〕

朱子「性はどうして道の形體であるか。」

陳淳「道は性に内在する理であるからです。」

朱子「道が広く言うものなら、性は我が身の上について言うものだ。事物の間に道が在ることをいかに知ることができるか。さあ、ここで考えてみよう。」〔劉砥の記録では「反身而求」に作る〕性の在る所であれば、すなわち、道の在る所である。道は物に内在する理であり、性は己に内在する理である。事物の理はすべて己のこの理に内在する。道のエッセンスは、つまり性なのだ。〕

劉砥「性は、物と我と、いずれにも存在していて、おそらく、己に在るか、物に在るかかと分けられない、ということでしょうか。」

朱子「道の存在しない所はないが、自分の身でもって試してはじめて道を知ることができるのだ。たとえば、『父子に親あり、君臣に義あり』（『孟子』滕文公上）のようなものは、自分の身の上において試さなければ、どうして道の實在性を知ることができよう。『天、有典を叙づ』（『尚書』虞書）とある。「典」は、これ天のことであり、それを我が身で試すことで、まさに『五典五惇』を知ることができる。『天、有禮を秩づ』とある。「禮」は、これ

天のことであり、我が身でもって試すことで、まさに『五禮有庸』を知ることができるのだ。」

陳淳「心は郭郭であるとは、すなわち心は性を包んでいるのでしょうか。」

先生、頷いて言う。

朱子「そうだ。横渠先生が仰った『心は性情を統べる』の一句は、不変的な言説である。孟子は心について説くことが多かったが、いずれもこの言説に一隅も似ていない。もっと詳しくみれば、他の諸子等の書を見ても、どれもこれに類似の説はない。」〔陳淳。徐寓同じ。劉砥同じ。〕

〔注〕

- (1) 「后稷教民稼穡。樹藝五穀、五穀熟而民人育。人之有道也、飽食、煖衣、逸居而無教、則近於禽獸。聖人有憂之、使契爲司徒、教以人倫。父子有親、君臣有義、夫婦有別、長幼有序、朋友有信。」〔『孟子』滕文公上〕
- (2) 「天叙有典～五典五惇。天秩有禮～五禮有庸」：「無教逸欲有邦。兢兢業業。一日二日萬幾。無曠庶官。天工人其代之。天叙有典。勅我五典五惇哉。天秩有禮。自我五禮有庸哉。同寅協恭和衷哉。」〔『尚書』虞書「皋陶謨」〕、「天叙有典、勅我五典五惇哉。天秩有禮、自我五禮有庸哉。許多典禮、都是天叙天秩下了、聖人只是因而勅正之、因而用出去而已。凡其所謂冠昏喪祭之禮、與夫典章制度、文物禮樂、車輿衣服、無一件是聖人自做底。都是天做下了、聖人只是依傍他天理行將去。如推箇車子、本自轉將去、我這裏只是畧扶助之而已。」〔『語類』第七十八、尚書一「皋陶謨」〕、「天叙有典、自我五典五敦哉。天秩有禮、自我五禮五庸哉。這箇典禮、自是天理之當然、欠他一毫不得、添他一毫不得。惟是聖人之心與天合一、故行出這禮、無一不與天合。其間曲折厚薄淺深、莫不恰好。這都不是聖人白撰出、都是天理決定合著如此。後之人此心未得似聖人之心、只得將聖人已行底、聖人所傳於後世底、依這樣子做。做得合時、便是合天理之自然。」〔『語類』第八十四、禮一「論後世禮書」〕。また、「天下之達道五、所以行之者三。曰君臣也、父子也、夫婦也、昆弟也、朋友之交也。五者天下之達道也。知、仁、勇三者、天下之達德也、所以行之者一也。」〔『中庸』〕の朱注に「達道者、天下古今所共由之路。即書所謂五典、孟子所謂父子有親、君臣有義、夫婦有別、長幼有序、朋友有信、是也。」とある。
- (3) 心統性情 「心統性情者也。有形則有體、有性則有情。發於性則見于情、發于情則見于色、以類而應也。」〔『張載集』「性理拾遺」〕
- (4) 依稀 よく似ている。髣髴。
- (5) 記録者の徐寓。字は居父(浦)、瑞安府永嘉縣(浙江省)の人。『宋元學案』卷六十九に略傳がある。
- (6) 記録者の劉砥。字は履之、福州長樂縣(福建省)の人。『宋元學案』卷六十九に略がある。田中謙二「朱門弟子師事年攷」一七一頁を参照されたい。

【37】正卿⁽¹⁾問「邵子所謂『道之形體』如何。」曰「諸先生說這道理、却不似邵子說得最著^(校1)實。這箇^(校2)道理、纔說出、只是虛空、更無形影。惟是說『性者道之形體』、却見得實有。不須談空說遠、只反諸吾身求之、是實有這箇道理、還是無這箇道理。故嘗爲之說曰『欲知此道之實有者、當求之吾性分之内。』邵子忽地於擊壤集序^(校3)自說出幾句^(校4)、最說得好。」

[賀孫]

【校注】

(校1) 和刻本、楠本本、正中書局本は「著」を「着」に作る。

(校2) 楠本本は「箇」を「个」に作る。以下、同じ。

(校3) 楠本本は、「擊壤集序」を「擊壤集序裏」に作る。

(校4) 楠本本は、「自說出幾句」の直後に「云身者心之區宇也心者性之郭郭也性者道之形體也物者身之舟車也」の二十九字有り。

【譯】

正卿「邵子が仰った『性は道の形體、心は性の郭郭である』という説について、いかがお考えでしょうか。」

朱子「諸先生も道理について説いているが、邵子の優れて本質的な言説ほどではない。この道理はわずかに（断片的に）述べられているので、空隙で影も形もみえにくい。だが、『性は道の形體である』という説は、むしろ實質を帯びていることが分かる。空虚で深遠なことを談論する前に、我が身に立ち返って、道は實在するか否かを求めるべきだ。だからかつて邵子はこう言った。『道の實在性を知りたいのであれば、吾が性分の内にそれを求めるべきだ』と。邵子は『伊川擊壤集』序に自ら数句で前置きなく説いたが、言い方が非常にうまい。

[葉賀孫]

【注】

(1) 正卿 林學蒙。福州永福縣（福建省永泰縣）の人。『宋元學案』卷六十九に略傳がある。田中謙二「朱門弟子師事年攷」二六六頁～二六八頁を参照されたい。

【38】或問「『性者道之形體』、如何。」曰「天之付與、其理本不可見、其總要却在此。蓋人得之於天、理元無欠闕。只是其理却無形象、不於性上體認、如何知得。程子曰『其體謂之道、其用謂之神。而其理屬之人、則謂之性、其體屬之人、則謂之心、其用屬之人、則謂之情。』⁽¹⁾」

[祖道]⁽²⁾

【校注】

なし。

〔譯〕

ある人「『性は道の形體である』とは、いかなるものでしょうか。」

朱子「(性は)天の付與したものであり、その道理はもとより見ることができないという、そういった要諦がこの言葉にはあるのだ。思うに人は天より性を得て、道理はもともと欠けるところがない。ただその道理に形象はなく、性の上において體認しなければ、どうして知ることができよう。程子は言う。『其の體を道と謂い、其の用を神と謂う。すなわち、道理は人において性と謂い、その體は人において心と謂い、その用は人において情と謂う』と。」

[曾祖道]

〔注〕

- (1) 「稱性之善謂之道、道與性一也。以性之善如此、故謂之性善。性之本謂之命、性之自然者謂之天。自性之有形者謂之心、自性之有動者謂之情。凡此數者皆一也。」(『二程遺書』)
- (2) 記録者の曾祖道。字は擇之、廬陵(江西省)の人である。『宋元學案』卷六十九に略傳がある。

【39】(校¹)問「性何以謂『道之形體』。」(校²)曰(校³)「若只恁說道、則渺茫(注¹)無據。如父子之仁、君臣之義、自是有箇(校⁴)模樣、所以爲形體也。」 [謨]

〔校注〕

- (校¹) 楠本本は、本條と次の【40】とが入れ代わっている。
- (校²) 楠本本は、「問性～形體」を「問論心之理邵子何以謂道之形體」に作る。
- (校³) 楠本本は、「曰」を「先生曰」に作る。
- (校⁴) 楠本本は、「箇」を「个」に作る。

〔譯〕

質問「性はどのように『道の形體』であると言うのでしょうか。」

朱子「もし道を論ずるとなると、漠然としていて據り所がない。「父子の仁」「君臣の義」というものは、自ずから模様(かたち)があつてその形體を爲しているからである。」 [周謨]

〔注〕

- (1) 渺茫 果てしないさま。遙か遠くではっきりしない。漠然としている。

【40】「性者、道之形體。」此語甚好。道只是(校)懸空(1)說。統而言之謂道。 [節]

【校注】

(校) 楠本本は、「是」を「恁」に作る。

【譯】

朱子「『性は道の形體である』と、この言い方は非常にうまい。だが、道はひたすら抽象的で拠りどころがないものだ。そのあたりを統べて言えば、道と言うのである。」 [甘節]

【注】

(1) 懸空 宙に浮く。現実から遊離する。拠りどころがない。

【41】「性者、道之形體。」今人只泛泛⁽¹⁾說得道、不曾見得性。 [椿] (校)

【校注】

(校) 楠本本は、「椿」を「文壽」に作る。

【譯】

朱子「『性は道の形體である』と。今人は表面的に道を説き、まだ性を知らない。」 [魏椿] (2)

【注】

(1) 泛泛 平凡な。表面的である。

(2) 記録者の魏椿。字は元壽、建陽の人。『宋元學案補遺』卷六十九に略傳がある。田中謙二「朱門弟子師事年攷」二二〇頁～二二二頁を参照されたい。

【42】「性者、道之形體。」性自是體、道是行出見於用處。(校)

【校注】

(校) 記録者が明記されていない。ただし、楠本本に「庚」字有り。

【譯】

朱子「『性は道の形體である』と。性は自ずから體であり、道は行われて作用するところにあらわれる。」

【43】才卿^(校1)問「性者、道之形體」。曰^(校2)「道是發用處見於行者、方謂之道。性是那道骨子。性是體、道是用。如云『率性之謂道』⁽¹⁾、亦此意。」 [僩]

【校注】

(校1) 楠本本は、「才卿」を「陳才卿」に作る。

(校2) 楠本本は、「曰」を「先生曰」に作る。

【譯】

才卿「『性は道の形體である』について伺います。」

朱子「道は發用して行いに見われるもの、まさにこれを道と言う。性は道のエッセンスである。性は體であり、道は用である。たとえば、『性に^{したが}率う、これを道と言う』というのも、またこの意味である。 [沈憫]

【注】

(1) 「天命之謂性、率性之謂道、修道之謂教。」(『中庸』第一章)

Notes on Japanese Translation of *Shao Tzu Chih Shu* 邵子之書
The 100th Book of *Chu Tzu Yü-lei* 朱子語類 Series : Part 2

SHIN Hyeon

This paper contains the notes on the Japanese translation of the Chinese *Shao Tzu Chih Shu* 邵子之書. The 100th book of *Chu Tzu Yü-lei* 朱子語類 series.

Chu Tzu Yü-lei consists of 140-volume books. It was compiled from the transcripts of dialogues between Chu Hsi 朱熹 and his disciples in the form of Written Vernacular Chinese. *Shao Tzu Chih Shu* covers their dialogues on the studies and concepts of Shao Yung 邵雍.

Shao Yung (1011-1077) was a Northern Song Dynasty Chinese Philosopher with its Courtesy name of Yao-fu 堯夫. After his death, he was presented the posthumous name of Kang-chie 康節.

Shao Yung was allegedly taught *T'u-Shu Hsien-T'ien Shang-Shu School of I Ching* 圖書先天象數學 (experimental approach using image-number for the philosophical interpretation of divination) from Li Chih-ch'ai 李之才. Li Chih-ch'ai was one of the successors to the tradition of the art of divination. It has been colored by the characteristics of Taoists as represented by Chên T'uan 陳搏.

As well as Shao Yung had followed these concepts of divination, he made several-decade-long efforts to establish its new art called as Hsien-T'ien I 先天易. He turned out to develop its original philosophy.

The essential concept of Hsien-T'ien I is *Kuan-Wu* 觀物. This concept amounts to reveal Tao (the conceptual path to keep the world balanced and ordered) by taking the following two steps. One is to think over the generation, development, and appearance of the universe. The other is to make a systematic understanding of human existence and its meaning.

Shao Yung thought that Hsien-T'ien I could return to clarify Confucian nature and his philosophy. This perspective was related to establish Tao Hsüeh 道學. Eventually he became he became known as one of the Five Confucian Masters of Northern Song.

His important works a series of *Book of supreme world ordering principles* 皇極經世書. All the books of this series are titled *Kuan-Wu Nei-P'ien* 觀物內篇. For these books, Shao

Yung drew on all his knowledge of the Shang-Shu (image number) theory, astronomy, and almanac derived from the studies on the divination in Han dynasty. On the other hand, he made a general survey of generating and developing the universe throughout this series.

This paper attempts to translate *Shao Tzu Chih Shu* as a clue to become aware that Chu Hsi understood Shao Yung's perspective on the art of divination.